

岩手県

はな まき し 花巻市

花巻市の国際交流 ～相互交流を中心として～



花巻市地域振興部生涯学習交流課

市町村合併後の国際交流事業

二〇〇六年一月一日、花巻市、稗貫郡大迫町、同郡石鳥谷町および和賀郡東和町は新設方式により合併し、新しい花巻市として誕生しました。この結果、新市はアメリカ・アーカンソー州ホットスプリングス市（旧花巻市姉妹都市、一九九三年提携）、オーストラリア・ニューダーエステライヒ州ベルンドルフ市（旧大迫町友好都市、一九六五年提携）およびアメリカ・バーモント州ラットランド市（旧石鳥谷町姉妹都市、一九八六年提携）の三市と姉妹・友好都市関係を引き継ぐこととなりました。また、これら三市のほかに旧東和町で実施されていたアメリカ・ウィスコンシン州クリントン中学校およびイギリス・シエットランド諸島のアンダーソン高校との交流も新市に引き継がれ、これら旧四市町から引き継がれた相互交流事業は五事業となっています。

また、二〇〇八年一月には中国・大連市西崗区との友好都市も提携され、今後中国との相互交流も本格的に始まることとなっています。

教育交流事業

これらの交流事業の中心はいずれも青少年の派遣と受入れの事業となっていますが、二〇〇七年度を例に取りますと、派遣生徒の数は九〇人、受入れ生徒の数は五五人となっています。派遣生徒にとってはほとんど

の場合、初めて海外訪問となり

ますので、まず事前の研修を通して、相手方の都市や学校の特徴を学び、知識を得てから実際に相手方を訪問し交流を深めておりますが、最近特に力を入れているのが課題解決型交流と呼ばれる交流形式です。この課題解決型交流とは、地域社会の抱える社会問題に注目し、その解決の糸口を姉妹都市との交流の中で得ようとする試みですが、当市の場合、当市の生徒と相手方の生徒の間で共通の課題を見出し、その課題を事前に研究した上で、相手方を訪問した際に議論を深め、何かしらの結果を見つけ出す作業を伴うものとなっています。

二〇〇七年度を例に取りますと、ホットスプリングス市との交流では、地球温暖化問題を取り上げ、当市からアメリカに行くまでに航空機から排出される二酸化炭素の量を割り出しました。そして、この二酸化炭素の量が生徒一人当たりの年間排出量に匹敵することを学び、ホットスプリングス市訪問時に相手方の生徒とともに、排出された二酸化炭素を少しでも相殺するというカーボンオフセットを目指した植樹作業を行いました。事前の研修やこの作業の中で、



↑ドキュメンタリーフィルム「パーフェクトマッチ」からの一場面

日米の生徒双方が地球温暖化問題に対する理解を深め、身近なところからこの地球規模の課題に取り組むことの必要性に気付くことができました。同様のカーボンオフセット作業は、二〇〇八年度のラットランド市との交流でも予定されています。

また、青少年の交流事業はこれまで一過性のもので終わる傾向がありましたので、派遣後も交流先の情報を派遣生徒に周知し、市の国際交流への参加を促しながら、国際交流の担い手の育成にも努めています。

■ 成人対象の交流事業

これら青少年の交流事業のほか、当市では成人の交流にも力を入れており、特に芸術や文化領域での交流を推進しております。これは現在、姉妹都市等交流研修事業と呼ばれる事業ですが、成人の個人や団体で姉妹都市および友好都市を訪問しようとする市民に助成金を交付し、滞在中の便宜供与を相手方に依頼するというものです。例を挙げますと、木目込み人形の制作グループや絵手紙の団体、あるいは地域の演劇集団など、これまで国際交流の舞台に上っていないかっ



↑カーボンオフセットのための植樹

た市民を姉妹都市等に派遣し、当市の芸術、文化の披露を通して交流を深めると同時に、これらの派遣グループの技能向上に努めています。一方、派遣された市民グループは当市の国際交流の担い手となっており、海外からの訪問団の受入れの際には積極的に協力をいたいただくようになっていきます。

■ 姉妹都市交流事業

ところで、ホットスプリングス市との交流は今年でちょうど提携一五周年を迎えます。この節目の年を記念するために、ホットスプリングス市にあるファウンテンレイク高校では、高校生グループが「The Perfect Match」(完璧な縁組)と題するドキュメンタリーフィルムを完成させました。この作品は上述の成人による芸術文化交流の様子を取り貯めていた映像や、二〇〇七年度にホットスプリングス国立公園創立二七五周年記念式典のために当市から派遣された伝統芸能鹿踊りの様子、また花巻市の最大の祭典である花巻まつりの様子など、日米双方で収録された映像を用いて、姉妹都市交流の意義や目的、過去一五年間の交流の様子が分かる作品となっています。この作品はホットスプリングス市と当市の双方で上映したほか、ケーブルテレビによって放映され、双方の市民に姉妹都市交流の意義を啓発する作品となりました。

また、当市の国際交流で最も歴史の長いベルンドルフ市との交流では、親善交流事業に加えてワイン醸造技術の研修やオー

トリアワインの輸入に結びついた経済分野での交流もなされてきました。

■ 新市での国際交流事業のあり方

このように平成の大合併によって生まれた花巻市では、多くの事業が引き継がれておりますが、合併前のそれぞれの地域での交流の成果を尊重しながら、新市としての一体化の醸成に努め、できるだけ多くの市民参画の下、有意義な交流事業を展開していきたいと考えています。そして、これら相手方の文化や伝統を知ると同時に、これらの交流を通して、日本や当市の独自性に気付き、それを尊重していく姿勢を育んで行きたいと考えています。

当市の偉大な先人である宮澤賢治は農民芸術概論綱要の序論で次のように書いています。

「自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する この方向は古い聖者の踏みまた教へた道ではないか 新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある 正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに依じて行くことである われらは世界のまことの幸福を索ねよう 求道すでに道である」

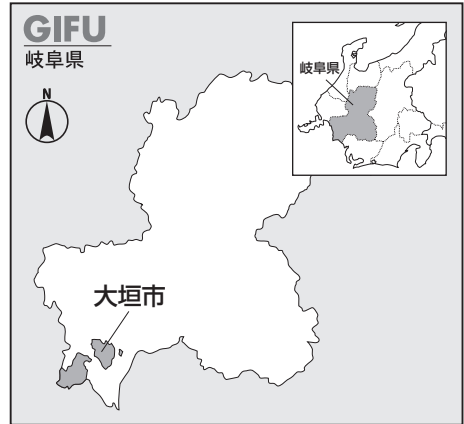
当市の国際交流は、この綱要を記した宮沢賢治や新渡戸稲造、高村光太郎など時代を先取りしていたコスモポリタンである先人たちの模範として進んで行きたいと考えています。

岐阜県

おお がき し

大垣市

～外国人市民にとっての 大垣市のあり方～



かがやきライフ推進部まちづくり推進課

大垣の風土・特色

大垣市は、岐阜県の濃尾平野北西部（西濃地方）に位置し、西に伊吹山、南西に養老山地を眺望できます。二〇〇六年三月二七日に養老郡上石津町と安八郡墨俣町と市町村合併し、全国でも特異な二重飛び地の自治体となり、面積二〇六・五km²、人口一六万六九六〇人（二〇〇八年四月二日現在）となりました。

大垣市は、自噴帯にあり良質な地下水が豊富で、市民の生活用水はもとより、工業用水としても最適であったため、大正初期から繊維工業を中心に工場が誘致されました。また、北西部の赤坂では、石灰工業、大理石工業が発展してきました。

しかし、多くの河川に囲まれていることから、古来よりしばしば洪水の被害に見舞われたこの地方では、水害から集落や耕地を守るため、網の目のように堤防を築造し、これらは「輪中」と呼ばれ、独特の風景が生まれました。また水害の多さから、江戸時代の宝暦年間に、幕命により薩摩藩が行った濃尾平野の治水対策として宝暦治水（木曾川、長良川、揖斐川の分流工事）が行われました。

治水の縁による都市交流

この歴史的な事業を風化させないためにと、本市で活動している(社)大垣青年クラブが一九六二年から薩摩義士の顕彰事業を推

進する中で、鹿兒島県鹿兒島市と交流を持つようになり、中学生の相互交流や観光交流事業などが行われるようになりました。なお、一九九三年からは、両市間において、観光を中心とした行政間交流も行っています。

フレンドリーシティ交流

時を前後して、本市では、一九八六年に職員からなる「大垣市国際化調査研究会」が発足し、地方都市における国際化のあり方について、調査・検討を行いました。その結果、当時盛んに行われていた「姉妹都市」という形式にとらわれず、市民主体の実質的な交流ができる方式を模索しました。そして、一九八八年、既に民間団体が活発に交流を行っていたスポーツ・文化・教育・産業等の分野での海外都市との交流を礎に、「フレンドリー構想」を考えました。



↑「第7回大垣市小・中学生 中国・邯鄲市研修派遣事業」 邯鄲駅にて

この構想の主眼は、一市民や一団体で進める国際交流は、財政的にも運営面でも困難な部分があることから、その支援体制を整え、そして、広く市民の方が参加できる交流にすることでした。そこで、交流のある都市を「フレンドリーシティ」として位置付け、交流の主体を市民とし、市はこれらの民間交流が活発化するように側面支援するこ

としました。

また、民間団体などの国際交流活動を取りまとめ、地域の国際化を推進する母体として、(財)大垣国際交流協会が設立されました。「フレンドリーシティ」としての交流先は、市民が自由で気軽に交流し合えるように、一九八八年の大垣市制七〇周年記念式典に、海外五都市国内一都市の関係者が一同に会することによって交流がスタートしました。(一九九八年に海外一都市が新しく加わる)

さらに本年は、市制九〇周年を機に、旧上石津町と鹿児島県日置市(旧吹上町)との交流が続いていることから、日置市に新規フレンドリーシティとして参加していただくことにより、さらなる交流を深めていきたいと思っています。

地域での国際交流・多文化共生へ

前段では、海外都市などとの交流の成り立ちを述べましたが、地域の国際化に関する施策について触れたいと思います。

一九九〇年の入管法の改正もあり、近年日系ブラジル人を初め多くの外国籍の人たちが入国されています。大垣市では、二〇〇八年四月一日現在の外国人登録者数は七三七〇人、人口(一六万六九六〇人)の約四・四%を占め、その約六割強がブラジル国籍、二割弱が中国籍です。本市には、大手の電子関連企業や自動車関連企業が所在しており、これらの企業が日系ブラジル人

などの外国人就労者を誘引し、生産活動の重要な担い手となっています。

ブラジル人の状況は、就労の場があることから、滞在期間の長期化、在留資格の変更(永住資格の取得など)による永住化・定住化傾向にあります。中国人は国の研修生制度によることから全体として、定住化傾向はありませんが、国際結婚などにより永住者は増えています。

本市では、このように外国人が増加し、滞在期間が長期にわたることから、日本人も外国人も同じ市民(外国人市民)であるという認識を持ち、互いの文化の違いを認めながら共存していく「多文化共生」を推進することが重要となっています。

市内の公立小中学校に通う外国人の児童生徒のために、市教育委員会では、各校に通う児童生徒を一校に集約して、日本語指導および学校生活全般にかかわる生活指導を行う「初期指導教室」を開設しています。なお、修了後は各校に開設する「日本語教室」にて対応しています。

また、外国人市民が日本語を学ぶ場として、(財)大垣国際交流協会では「マンツーマン方式日本語勉強会」など日本語教室を開催しており、ボランティアの皆さまのご協力により日本語勉強会が



↑マンツーマン方式日本語勉強

行われています。同協会ではさらに、外国人の皆さんに日本の文化・風習を知ってもらうために、日本人の家庭でのホームビジットなどを行い、相互理解の推進に努めています。

外国人集住都市会議への参加

南米日系人などが多く在住する都市により構成される同会議は、二〇〇一年に結成され、現在は本市を含め二六都市が参加しています。各都市単独では解決できない法律や制度にかかわる諸課題などを改善するため、国などに対し、連携して働きかけを行っています。

また、都市間において、情報の共有や交換をすることにより、市民が住みやすくなるための施策を創出していきたいと思います。

最後に

現在、国境を越える人材、情報などの流動のボーダーレス化が進んでおり、今後もさらに加速していくと考えられます。

世界各地の経済的、政治的、社会文化的つながりが広がっていくため、グローバルゼーションの進展とともに人とモノの移動がますます活発になります。こうしたことから、今後日本社会においても、異文化理解・国際理解をより一層推進することによって、言語・生活習慣など文化の違いを認め、人権を尊重し、多文化共生社会の実現を目指すことが必要となっていくと思われれます。